

子宮がん検診（車検診）

動 向

検診車による子宮がん検診は、昭和43年度から開始され、県下市町村からの委託事業として当協会が配車し、細胞診断と結果報告を担当している。検診は県下の北里大学・東海大学・横浜市立大学・聖マリアンナ医科大学・日本医科大学武蔵小杉病院の産婦人科の医師が担当し、この5大学と県立がんセンターの婦人科腫瘍専門医からなる「子宮がん車検診実施検討会」で、精度管理・向上に努めている。

細胞診判定法が、平成21年度よりベセスダ・システム準拠日産婦医会分類に改定されている。

本年度から「再診者」を従来の車検診既受診者から変更し、“最近3年以内にいずれかの施設で検診を受診したと申告した者”と規定した。

また、がん検診受診率向上を目的とした「無料クーポン券」については、平成25年度で、5歳刻みの節目年齢者への配布が終了し、平成26年度は、概ね20歳の方と平成21年度から25年度のクーポン未利用者が対象となった。

子宮頸がん検診結果

検診実施数は21,348名で、昨年度より880名減少し、H24以来微減傾向にある。年齢階級別では、やはり60歳代が最も多く、次いで70歳代以上、40歳代と50歳代の順で、高年者に多かった。期待された30歳未満の受診者は昨年より少ない558名、2.6%だった。40歳未満では13.4%と年々減少傾向にある。また、初診者（初めての検診受診者、4,476名）は21.0%に止まった。うち若年者の割合は30歳未満6.8%、30歳代16.4%で、昨年より低下した。

要再検・精検率では、細胞診LSIL以上（旧分類クラスIIIa以上）の要精検者は0.54%（115名）、ASC-US（クラスII再検）による要再検者は1.00%（214名）だった。昨年の0.45%、0.93%より少し高く、両者合わせた要再検・精検率は1.54%だった。再・精検の実施率は平成27年8月末の集計時点で84.50%、うち精検者87.83%、再検者82.71%だった。昨年度に比べ改善傾向にある。

要再検・精検者の再検・精検結果は表4～6の如くである。発見癌のうち頸癌は11例（上皮内癌7例の外、Ia期、Ib期、II期以上、腺癌I期以上それぞれ1例）で、早期癌の頻度は72.7%だった。頸癌発見率0.05%は例年の0.07%をやや下回った。しかし、初診者からの頸がん発見率は0.13%と高く、一方、再診者（検診受診経験者）のそれは0.03%と低いことには変わりがない。頸癌のうち上皮内癌1例が要再検群から発見されており、70歳以上の高年群だった。初診者での癌発見率では、最も高い発見率が近年では40歳代から30歳代に若年化し0.27%と高かった。初診者の多い30-49歳の若年者で高い頸が

ん発見率であることには変わりがないが、65歳以上の初診者でも0.28%と高かった。新基準による再診者中から60歳代に進行癌が3例発見された。

発見された異形成は80例（軽度45例、中等度20例、高度15例）である。異形成発見率は0.37%で、昨年の0.17%より高かった。初診者の、異形成の発見率は0.74%と一層高く、年齢階級別では30歳未満0.65%、30歳代2.46%、40歳代0.91%を示し、若年初診者に高かった。しかし、65歳以上でも0.28%を示していた。再診者からも、異形成は0.28%の高頻度で発見され、とりわけ20、30、40歳代ではそれぞれ0.79%、0.70%、0.57%と高い頻度だった。さらに年長者でも発見されている。繰り返し受診者であっても異形成の発見頻度は低くないことを銘記してきたい。

細胞診判定ASC-USのため要再検となった者214名から、上皮内癌が1例（発見率0.5%）、異形成が28例（13.1%）（軽度23例、中等度3例、高度2例）が発見されている。

頸癌以外の癌は、本年度は発見されなかった。

評 価

若年者の受診は期待に反して伸び悩んでいた。20、30歳代の若年者では異形成や頸癌の発見率が高いところから、若年者の検診受診が一層勧奨される。

これまで一次検診を担当した県下各大学に誘導することによって要再検・精検実施率の高い実績を誇っている。本年度は昨年度に比べ改善した。

子宮頸癌ならびに異形成の発見率は初診者に高いことはこれまでの統計通りであり、未受診者への受診勧奨に一層努めたい。一方、再診者での癌発見率は著しく低下するものの、異形成の発見率は0.1%と高頻度を示していることから、再診者へも定期的な検診受診の継続が勧奨される。

総検診数の低下は、子宮がん検診無料クーポン券が20歳と過年度の未利用者に限定されたせいであろう。配布が無くとも一層の受診勧奨に努めたい。

細胞診報告様式であるベセスダシステム準拠日本産婦人科医会分類は順調に普及しているが、新基準であるASC-USにより要再検の頻度が上昇している。しかし、その頻度は1%に止まっており、順当な頻度と思われる。

昨年度の検診で、出血のため緊急搬送した例が1例経験された。本症例に付き検証し管理体制を改善して検討会に報告し、了承を得た。出血頻度の高い細胞採取器具Cervex-Brush Combiの変更に付き検討することにした。

関係の集計表は89頁に掲載